

[普及事項]

新技術名：ニホンナシ「秋泉」は満開 65 日後の捻軸処理により軸折れ落果を防止できる  
(平成 27 年)

研究機関名 果樹試験場 総務企画室 天王分場班  
担当者 菅原哲平・熊谷 一

[要約]

ニホンナシ「秋泉」は、満開 65 日後に横～上向きの果実へ捻軸処理をすることにより、軸折れ落果を防止することができる。

[普及対象範囲]

県内のニホンナシ生産者

[ねらい]

ニホンナシ「秋泉」は、700 g と大果であることに加え、果梗がもろいため、上向きの果実を中心に軸折れ落果が発生する。摘果時にこのような果実を残さないことが対策の一つであるが、結実量の不足等でやむを得ず着果させなければいけない場合もあるため、収穫期直前の強風等による減収が問題となっている。そこで、同様の特徴を持つ「あきづき」や「早水」で実用化されている捻軸処理の軸折れ落果防止効果を明らかにし、本技術を普及する。

[技術の内容・特徴]

1. 「秋泉」の棚面に対して 45～90 度の果実（図 1 左）への満開 65 日後の捻軸処理は、軸折れ落果を防止する効果がある（表 1）。捻軸処理は、果実の赤道部を指で持ち、果軸の中央部が捻れるように果実を回し（図 1 ①）、果重で下を向く様に癖付けする（図 1 ②）。
2. 捻軸処理を実施した「秋泉」の果実は、無処理区と同等の果実品質である（表 1）。

[成果の活用上の留意点]

1. 捻軸処理を行った果実は、こうあ部（果梗部側）に枝ずれによるキズがつく場合が多い。また、処理により果梗が捻転し、癖付けした部分がカルスにより太くなるため、収穫時に果梗を切除する際には、キズを付けないように細心の注意を払う。
2. 捻軸処理は、実施時期が早いと果実の重みが足りず、果梗を捻っても向きが元に戻る。一方、実施時期が遅いと果梗が硬くなり、処理時に折れてしまう危険性が高くなる。

[具体的なデータ等]

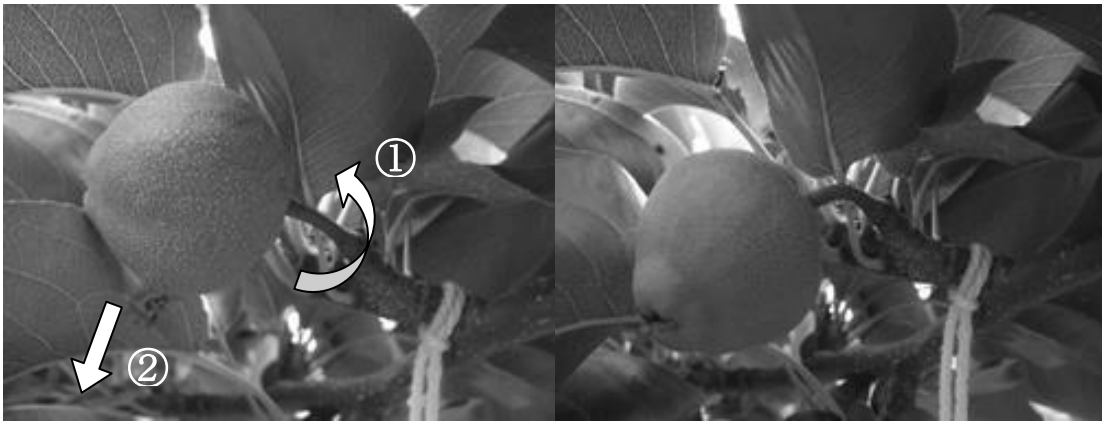


図1 捻軸処理の様子  
(満開 65 日後 左：処理前、右：処理後)

表1 「秋泉」の捻軸処理が軸折れ落果および果実品質に及ぼす影響（平成 27 年）

試験区	供試果数 (個)	軸折れ落果率 (%)	果重 <sup>z</sup> (g±S.D.)	非破壊糖度 (Brix %±S.D.)
処理区	49	6.1	661±123	14.2±0.7
無処理区	50	60.0	692±123	14.3±0.6
有意性	-	* <sup>y</sup>	n.s. <sup>x</sup>	n.s. <sup>x</sup>

<sup>z</sup> 対数変換後、検定を実施

<sup>y</sup> \*  $\chi^2$  検定により  $P < 0.05$  で有意差あり

<sup>x</sup> n.s. t 検定により  $P < 0.05$  で有意差なし

[発表論文等]

なし